第１章　河南町の現況（すがた）

（１）位置

本町は、大阪府の南東部に位置し、東西６．７㎞、南北７．５㎞で、面積は２５．２６㎢となっています。東は葛城山脈が連なり、奈良県御所市、葛城市と境をなし、西は富田林市、南は千早赤阪村、北は太子町と接しています。

大阪の中心部までは約２５㎞圏内、世界への玄関口である関西国際空港までは約３５㎞圏内にあります。

（２）人口

平成２７年の国勢調査では、人口１６，１２６人、６，１１５世帯となっています。

国勢調査の人口推移では、住宅開発などが行われたことから、平成１７年に１７，５４５人とピークを迎えましたが、その後、少子高齢化の流れの中で、平成２２年には１７，０４０人、平成２７年には１６，１２６人に減少しています。

世帯数は、人口ピーク時の平成１７年には６，４１９世帯でしたが、平成２７年には６，１１５世帯に減少しています。人口減少の中ではありますが、核家族化が進展するなど世帯数の減少は緩やかなものとなっています。

（３）地勢

本町は、東に葛城山脈が連なり、これを背景に東から西に向けて緩やかな傾斜が続いています。東部は大半が山林で、田畑は西部に位置し、南から北へ帯状に延びて河内平野に連なっています。

葛城山系を源とする水越川は、千早川と合流して西部を流れ、梅川は中央を貫き北流し、石川を経て大和川に注いでいます。

土地利用は、面積の過半を山林が占め、農地、水面を加えて緑地系が４分の３を占めていますが、丘陵地においては住宅団地が造成されています。また、小規模な開発による住宅地の形成もみられます。

（４）沿革

本町の歴史は古く、約１万年前の縄文時代早期に、人が住み始めています。弥生時代後期になると、町北部・西部の丘陵上に集落が築かれるようになりました。

古墳時代の集落の様子はあまり明らかになっていませんが、古墳時代前期（４世紀）になると、弥生時代後期の集落があった丘陵上に古墳が築かれ始めました。古墳時代後期（６世紀）になると、町北部から太子町にかけての丘陵上にも古墳が築かれます。ここは、総数約２５０基からなる一須賀古墳群で、わが国の代表的な群集墳です。

この頃、本町を含む一帯は、難波宮と大和を結ぶ日本最古の官道である竹内街道沿いにあって、大和の飛鳥が「遠つ飛鳥」と呼ばれたのに対して、難波宮の近くにある飛鳥として「近つ飛鳥」と呼ばれるようになりました。この時代は、蘇我氏や渡来人との関わりが深く、国際色豊かな文化圏を形成していました。

７世紀末には、役行者が修験道の礎を築き、平安時代末期の歌人西行法師が永眠する弘川寺や高貴寺が開かれました。南北朝時代に起こった戦乱が鎮まった中世末には、大ケ塚で寺院を中心とした町場、いわゆる「大ケ塚寺内町」が形成され、次第に市場町へと変貌し、地方商業都市として栄えました。この状態は、近世を経て近代の明治中期まで続きました。

明治２２年には、町村制の施行により１７村から石川、白木、河内、中の４村が誕生しました。その後、明治３１年に柏原から富田林間に鉄道が開通したものの、その鉄道網から外れた結果、経済の中心を維持することが困難となり、農村集落としての歩みをたどりました。

昭和３１年には、町村合併促進法によりこれら４村が合併して河南町が誕生し、本年９月に町制６５周年を迎えます。

その後は、大阪都市圏の農作物供給地として都市近郊農業を中心としたまちづくりが進められてきました。昭和３９年に町北部に浪速芸術大学（現大阪芸術大学）が開校、昭和４３年から北部丘陵地での住宅団地の開発（現大宝地区）や昭和６０年から東部丘陵地の住宅団地の開発が進み、平成５年からはさくら坂、平成９年からは鈴美台、平成１９年からはさくら坂南への入居が始まり、市街地の形成が進むことになりました。

第２章　計画策定の意義

１　時代の流れ

昭和５４年に初めて総合計画を策定して以降、四次にわたって総合計画を策定し、豊かな自然と古くから開けたこの地の歴史を活用し、農業の振興や生活基盤の整備など、まちづくりを進めてきました。

また、本町の人口は、平成１７年をピークに減少に転じていますが、日本全体が人口減少社会に突入する中、各地域において住みよいまちを如何に維持・発展させていくかが、ますます大きな課題となっており、本町でも、平成２８年に総合戦略にあたる「河南町まちづくり計画」を策定し、さまざまな取組みを進めてきました。

近年、少子高齢化のさらなる進展、人口減少、人々の価値観やライフスタイルの多様化、地球規模の環境問題の深刻化、災害の激甚化などにより、地域社会も、大きな変容を迫られています。

平成２６年に制定した「かなんまちづくり基本条例」では、『住民、議会及び町が手を取り合い、人々が住みたいと思うまちを実現することを目的とします。』と規定しています。

上記のようなさまざまな環境変化や問題に適切に対応し、地域社会の持続可能性を高めるとともに、より住みやすいまちを実現するため、まちづくり基本条例の考え方に則り、これまで以上に、住民、事業者の方々等と緊密に連携したまちづくりを進めていく必要があります。

２　計画策定の目的

本町を取り巻くさまざまな環境変化や課題に適切に対応し、より住みやすく、より魅力ある河南町を実現するため、住民、事業者、議会、行政の協働によってまちづくりを推進していく必要があります。

新しいまちづくり計画は、このような考え方に立ち、これまでの成果を踏まえつつ、住民、事業者、議会、行政が力を合わせて、「来てよし、住んでよしの『あ・な・ば』かなん」を実現するために、中長期的に目指すべき方向性やまちの姿を示すとともに、その実現に向けて、直近で取り組んでいく内容を明らかにすることを目的として、第四次総合計画とまちづくり戦略の双方を合わせ発展的に策定するものです。

この計画は、かなんまちづくり基本条例第１４条に規定するまちづくり計画として、町政運営の基本的な指針となるもので、町政の最上位計画として、部門別の各種計画の基本となるものであり、また、住民の方々や各種団体、事業者などが、それぞれの役割等に応じて積極的、主体的に取組みを進めていただくうえでの共通の指針となるものです。

3　計画期間

本まちづくり計画は、基本構想と基本計画に分かれています。

基本構想のうち、ひとづくりビジョン（人口フレーム）については２０６０年までの人口目標を示しており、将来都市構造などその他の部分については、まちが中長期的に目指していく姿を示しています。

基本計画については、構想を実現するために直近で取り組んでいく施策を示すもので、目標年次は令和７年とします。

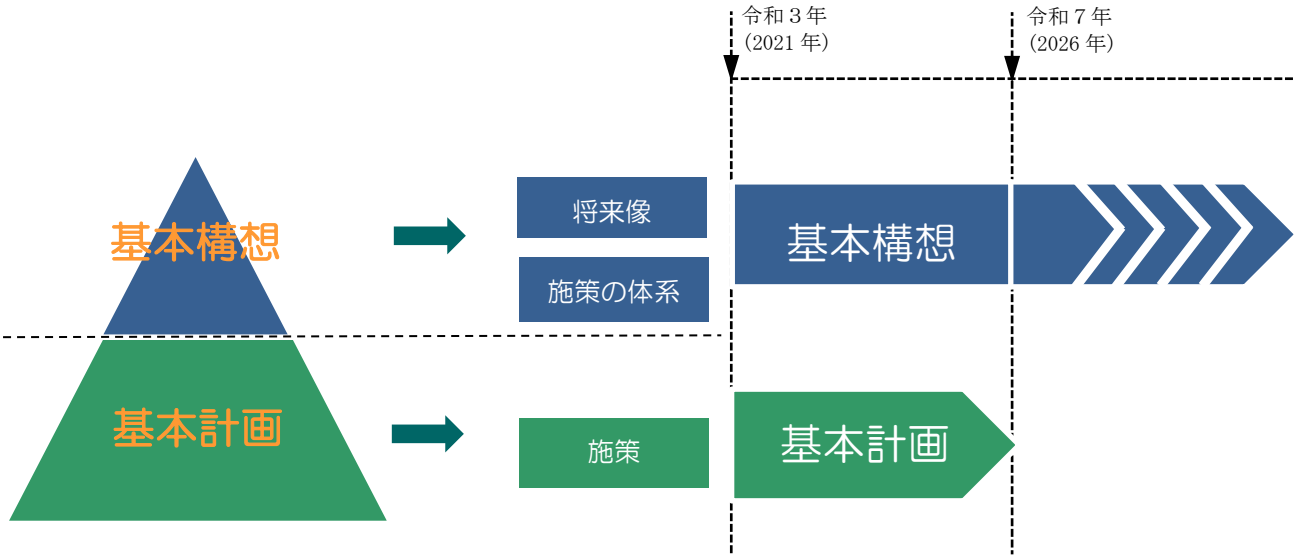


図　河南町まちづくり計画の期間

4　新しいまちづくりの視点

視点 1.　人口減少、少子高齢化への対応

本町の人口は、平成１７年以降減少に転じており、また、出生数も過去に比べて低い水準にとどまっているため、今後もさらに少子高齢化や人口減少が見込まれます。

そのため、次世代を担う子どもたちに関する子育て支援や教育・保育環境の向上、高齢者も含めて全住民が生涯活躍できる環境の整備、人口減少に備えた公共施設の効率化等が必要です。

視点 2.　安全・安心

安全で安心して日々を過ごせる社会を実現することは、まちづくりの基本的かつ最重要の目的です。災害の激甚化、感染症、IT の進展に伴う新たな消費者トラブル等、日常生活を取り巻くさまざまな脅威に対して、適切に対応して安全・安心を提供できるまちづくりに取り組む必要があります。

視点 3.　SDGs

SDGs の理念を活用してまちづくりを進めることにより、持続可能で多様性と包括性のある社会の実現に向けて、経済・社会・環境を巡る広範な課題に統合的に取り組んでいく必要があります。

視点 4.　地域産業の強化・育成

本町の主要産業である農業については、担い手の高齢化や耕作放棄地の増加を踏まえ、新規就農者の参入や高付加価値化の促進などに取り組んでいく必要があります。また、南阪奈道路や国道 309 号などによる交通アクセスを活かし、企業誘致を含め産業の育成・強化に取り組んでいく必要があります。

視点 5.　文化資源を活用したまちの個性・魅力の創出

本町は古くからの歴史を有しており、国指定史跡「金山古墳」、日本遺産「葛城修験」を構成する葛城２８宿のうち妙音菩薩品や観世音菩薩普門品など、貴重な文化遺産が存在しています。

町内外の人々、がこれらの文化資源や本町の歴史の持つ魅力を楽しめるようなまちづくりに取り組んでいく必要があります。

視点 6.　自然を活用したまちづくり

本町は、葛城山脈から連なる自然や棚田などの田園風景など、多様で良好な景観を有しています。地域産業の育成と両立させつつ、こうした豊かな自然や良好な景観を活かしたまちづくりを進めていく必要があります。

視点 7.　交通網・交通機関の改善

本町は、大阪都市圏の中心である大阪市から約 25km の距離にあるという地理的条件を最大限に活用できるよう、大阪南部高速道路の実現や府道・町道の整備の促進など、交通網の改善を進めるとともに、高齢化社会のさらなる進行等に備えて、地域公共交通の改善など、公共交通機関の整備にも取り組んでいく必要があります。

視点 8.　行政改革

本町が実施しているさまざまな事業について、事業開始後の社会情勢の変化に照らして、必要性が乏しくなっているものがないか点検・見直しを行うことにより、限られた資源を必要な分野・施策に活用していく必要があります。

視点 9.　参画と協働によるまちづくり

地域が抱えるさまざまな課題に適切に対応し、人々が住みたいと思うまちを実現するためには、行政と地域住民が協力していくことが必要不可欠です。そのため、かなんまちづくり基本条例の趣旨にのっとり、地域を取り巻く関係者が協働し、住民が主役となるまちづくりに取り組んでいく必要があります。

第１章　まちづくりの目標

少子高齢化や人口減少、人々の価値観やライフスタイルの多様化など、本町を取り巻く社会経済構造は大きく変化しています。

こうした中、地域社会の活力を維持し発展させていくためには、住民１人ひとりが生活にゆとりを持ちながら、希望するライフスタイルを実現することができ、本町に興味を持って加わる人を含め住民が地域コミュニティに溶け込み活躍できるまちづくりを目指す必要があります。

このため、新しいまちづくりのキーワードを「あそびがある」「なじみやすい」「はぐくめる」の３つとし、大都市近郊にありながら、豊かな自然に囲まれた立地を活かして、住民がこうした自然や歴史を楽しめるようなゆとりのある暮らしを実現できる、地域や住民が助け合いながら課題を解決していく、そして子どもも大人も自らの夢に向かって進んでいける「あ・な・ば」かなんの実現を目指して、まちづくりを展開します。

「来てよし、住んでよしの『**あ・な・ば**』かなん」の実現

イメージ写真

あそびがある　充実した暮らしとともに
さまざまな楽しみがあるまち

本町は、豊かな自然と古（いにしえ）から受け継がれてきた歴史を有しており、住民はもとより、より多くの人がこうした良さに触れられるまちを目指します。

また、地域の祭りや行事などに見られる、これまで培われてきた歴史、生活、文化が融合した「くらし」や、まちの魅力ある豊富な資源を活用し「たのしみ」にあふれた「あそびがある」充実した生活を送れるまちを目指します。

なじみやすい　住民同士や地域間で
コミュニケーションや助け合いがあるまち

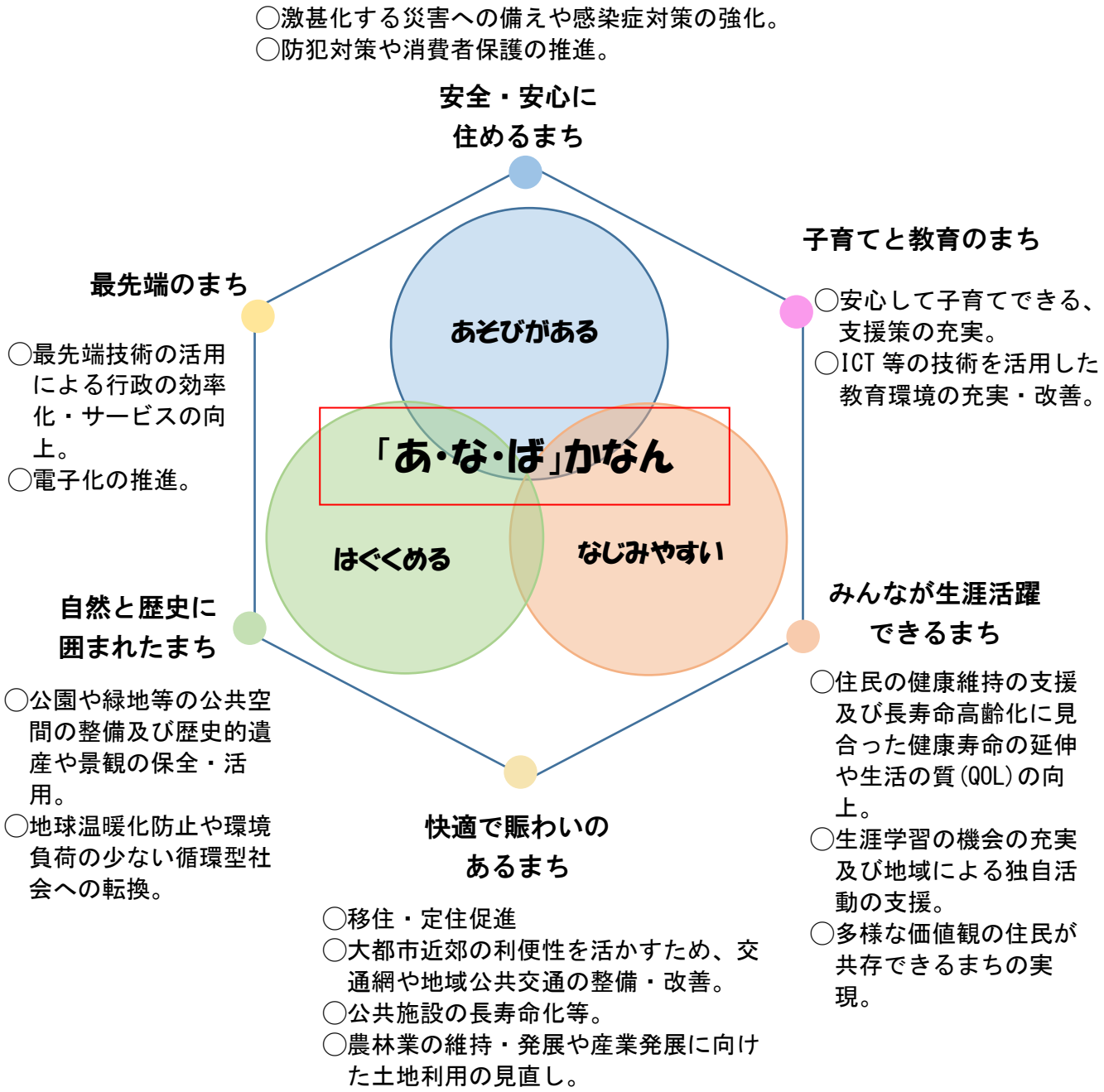
防災活動、清掃活動、伝統行事など、さまざまな活動を通じて、住民同士や地域間でコミュニケーションや「たすけあい」があるまちを目指します。

また、町外から本町に転入を希望する人へのアプローチを強化するとともに、転入した人が地域に「なじみやすい」まちづくりを目指します。

はぐくめる　子どもは夢を持って成長ができる
大人は夢の実現ができるまち

自然と歴史に囲まれた環境で、子どもたちは地域に見守られながら、将来に「ゆめ」をもって成長できる、大人はライフステージに応じて、自分の希望するライフスタイルを実現できる、誰もが「ゆめ」を「はぐくめる」まちを目指します。

あそびがある・なじみやすい・はぐくめる「来てよし、住んでよしの『あ・な・ば』かなん」の実現に向けて、「安全・安心に住めるまち」「子育てと教育のまち」「みんなが生涯活躍できるまち」「快適で賑わいのあるまち」「自然と歴史に囲まれたまち」「最先端のまち」の６つの体系に基づき、施策を進めていきます。



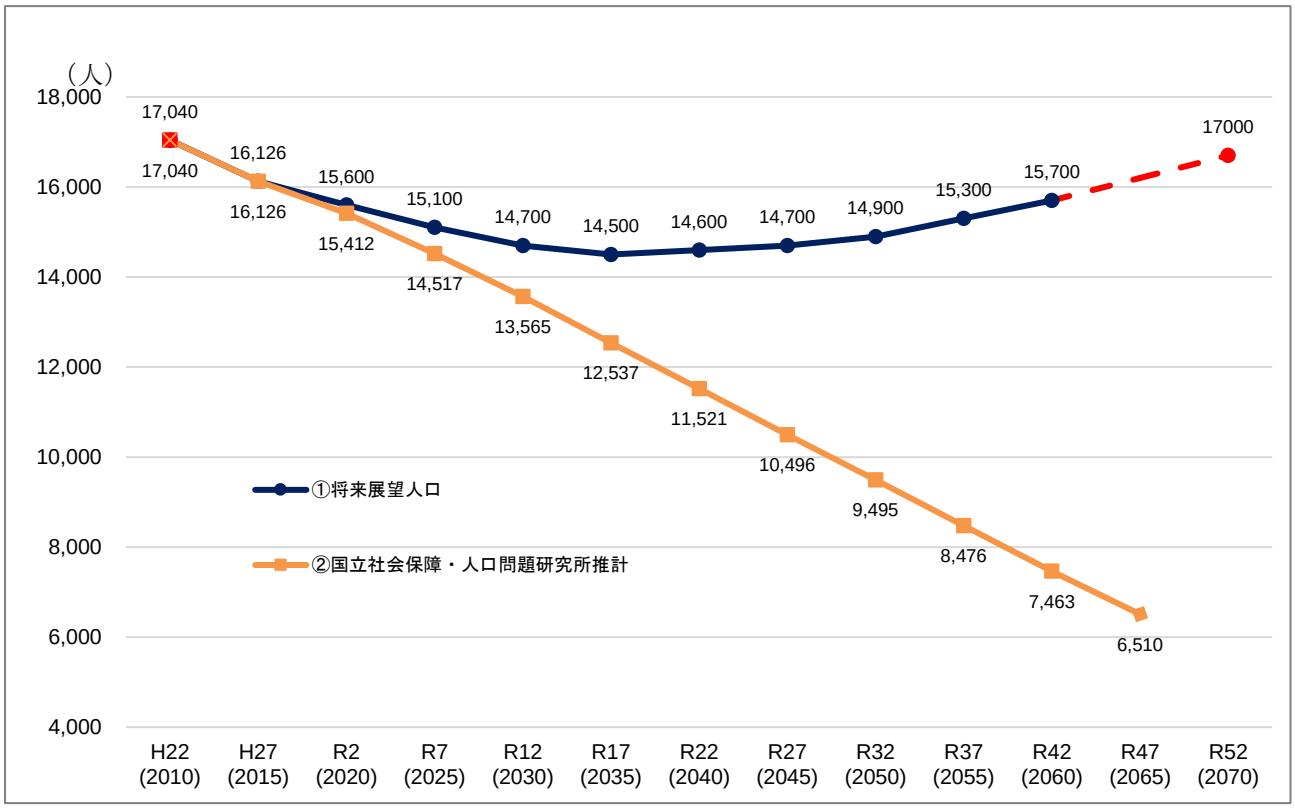
第２章　人口フレーム（人口ビジョン）について

国の「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」では人口減少がこのまま続けば「人口は急速に減少し、その結果、将来的には経済規模の縮小や生活水準の低下を招き、究極的には国としての持続性すら危うくなる。」と警鐘を鳴らしています。

本町では、まち・ひと・しごと創生長期ビジョンを踏まえて人口を分析し、河南町ひとづくりビジョン（人口ビジョン）を平成２８（2016）年に策定しました。

そこで、人口減少に歯止めをかけ地域の活力を維持するため、若者・子育て世代の定住促進や子育て支援施策等を推進してきました。

前回のビジョン策定から約５年が経過し、その間に平成２７年国勢調査の結果が公表されたことや、直近の人口動態の状況等を勘案するとともに、引き続き、若者・子育て世代の定住促進策等を推進することにより、本計画における将来展望人口を令和４２（2060）年に１５，７００人、令和５２（2070）年に１７,０００人とします。



【河南町将来展望人口：総人口の推計】

○　目指すべき将来の方向

〇将来展望人口：令和５２（2070）年に、１７，０００人

〇合計特殊出生率：令和１２（2030）年に 1.80、令和２２（2040）年に 2.07 に向上

〇人口の定着

社会増を令和１２（2030）年に３５（人／年）程度、その後徐々に増やし、令和２２（2040）年に１２０（人／年）程度、令和４２（2060）年には１６０（人／年）程度に増やす。

第 3 章　将来都市構造

本町は、東側に金剛生駒紀泉国定公園に指定された金剛・葛城山脈に連なって田園風景や市街地が広がっています。また、金山古墳や一須賀古墳群、日本遺産となった葛城修験に含まれる平石峠や高貴寺香華畑にある経塚などの歴史的資源に恵まれているほか、文化芸術の拠点となる大阪芸術大学が立地しており、こうした歴史的資源を活用しつつ、さまざまな主体と協力しながら、まちづくりを進めていくことが求められています。

あそびがある・なじみやすい・はぐくめる「来てよし、住んでよし『あ・な・ば』かなん」の良さを伸ばしていくためには、各地域の特性を活かしながら、地域の土地利用の方向を明確に定め、適切な土地利用の規制・誘導が望まれます。

この基本的な考えとして、まちの骨格を形成する地域形成の基本方向（将来都市構造）を設定し、まちづくりを進めていきます。

①　都市軸（まちづくりの骨格）

将来都市構造においては、広域連携軸と地域連携軸を設定し、それらが交流する接点等において、まちづくりの骨格となる拠点を配置し、各拠点において、それぞれの機能がバランスよく発揮できるよう整備を図ってきました。本計画においては、引き続き、本構造に基づく整備を進めていきます。

（広域連携軸）

広域的な連携軸として、国道及び主要地方道によるまちづくりの骨格形成を図るため、国道 309 号や主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線などの広域的な機能の充実に努めます。加えて、国道 309 号や柏原駒ヶ谷千早赤阪線沿いの土地について、第 2 次産業、第 3 次産業が展開できる地域となるよう土地利用規制の柔軟化を目指します。また、大阪市中心部や関西国際空港などと接続し、まちの発展の源となる大阪南部高速道路（大南高）の実現に向けて働きかけを続けていきます。

（地域連携軸）

まちづくりの骨格となる広域連携軸を取り巻く補助的な役割を担い、町内の各拠点や集落などを結ぶ道路を、引き続き、地域連携軸と位置付けます。

本町の豊かな自然や歴史、産業などの地域資源を活かした各拠点の整備を進めるとともに、地域公共交通等により、地域住民の日常生活の利便性やアクセスの向上を図ります。

また、連携軸の結節点においては、交流のためのにぎわいある空間の形成を目指します。

① 拠点形成

（学術文化交流拠点）

引き続き、大阪芸術大学を本町における学術文化の中心として、町内外への多様な情報発信の拠点とします。

また、地域住民と大阪芸術大学との交流の輪を広げ、町北部の拠点として、生活環境の充実や生活利便性の向上に努めます。

（町中心部地域）

町役場を中心として、生活利便性の向上や安全・安心な暮らしを実現するための行政、文化をはじめ各種施設の集積を進めてきました。今後は、役割を終えた公共施設跡地の整備を進めることにより、地域公共交通により町北部と南部を連結する拠点としての性質を活かし、生活サービス機能の集約・確保、町内外との交通ネットワークの連結拠点としての整備を図ります。

（産業交流拠点）

広域連携軸の結節点付近を中心として、商業施設の集積などの都市機能の充実を図るとともに、新たなブランドを創出する拠点整備を進めます。

また、町南部の拠点として、地域産業との融合を図りつつ、産業振興と都市住民との交流を促進します。

（歴史・観光レクリエーション拠点）

本町にある近つ飛鳥博物館は、令和元年７月に世界遺産に指定された百舌鳥・古市古墳群を含む古墳時代をメインテーマとする施設となっています。このほかにも、町北部には高貴寺、日本遺産となった「葛城修験」の構成文化財のうち２つの経塚（平石峠・妙音菩薩品、高貴寺香華畑・観世音菩薩普門品）、町南部には金山古墳、弘川寺歴史と文化の森などから成る豊かな自然や歴史文化的環境が存在しており、こうした特性を活かして観光レクリエーションを通じた都市住民との交流、産業の発展を目指します。

②　ゾーニング

（学術文化居住ゾーン）

大阪芸術大学とその周辺地域一帯は、優れた住環境を創出する、学術文化居住ゾーンとします。

既成市街地において、都市基盤の整備などにより快適な住環境の整備及び各種店舗や作業場が進出できるよう土地利用の緩和を進めるとともに、広域連携軸沿道においては、沿道サービスの立地など、住民の生活利便性の向上に努めます。

また、周辺の農地については、都市的な土地利用との調和を図りつつ、農業振興のための優良な農地を保全します。

（田園居住ゾーン）

都市近郊農業を中心とした農地が広がる農空間や集落地を中心とした地域、丘陵部に広がる新市街地などを田園居住ゾーンと位置づけ、自然や農業と住民生活が調和したゾーン形成を図ります。役場周辺においては、生活利便性の向上や安全・安心な暮らしを実現するための行政、文化をはじめ各種施設の集積は一定程度進んでおり、今後は、役割を終えた公共施設跡地の整備により、町北部と南部を連結する町全体の拠点の整備を図ります。

農業を通じた地域間交流、農業の生産性向上のための基盤整備を進めるとともに、農産物などのブランド化に取り組みます。山間部の田園風景などは、貴重な景観として保全に努めます。

集落地においては、公共下水道などの生活インフラを維持し、自然や農業との調和を図りつつ、生活環境、美観を充実するとともに、新市街地については、住民協働により良好な住環境の保全と増進に取り組みます。

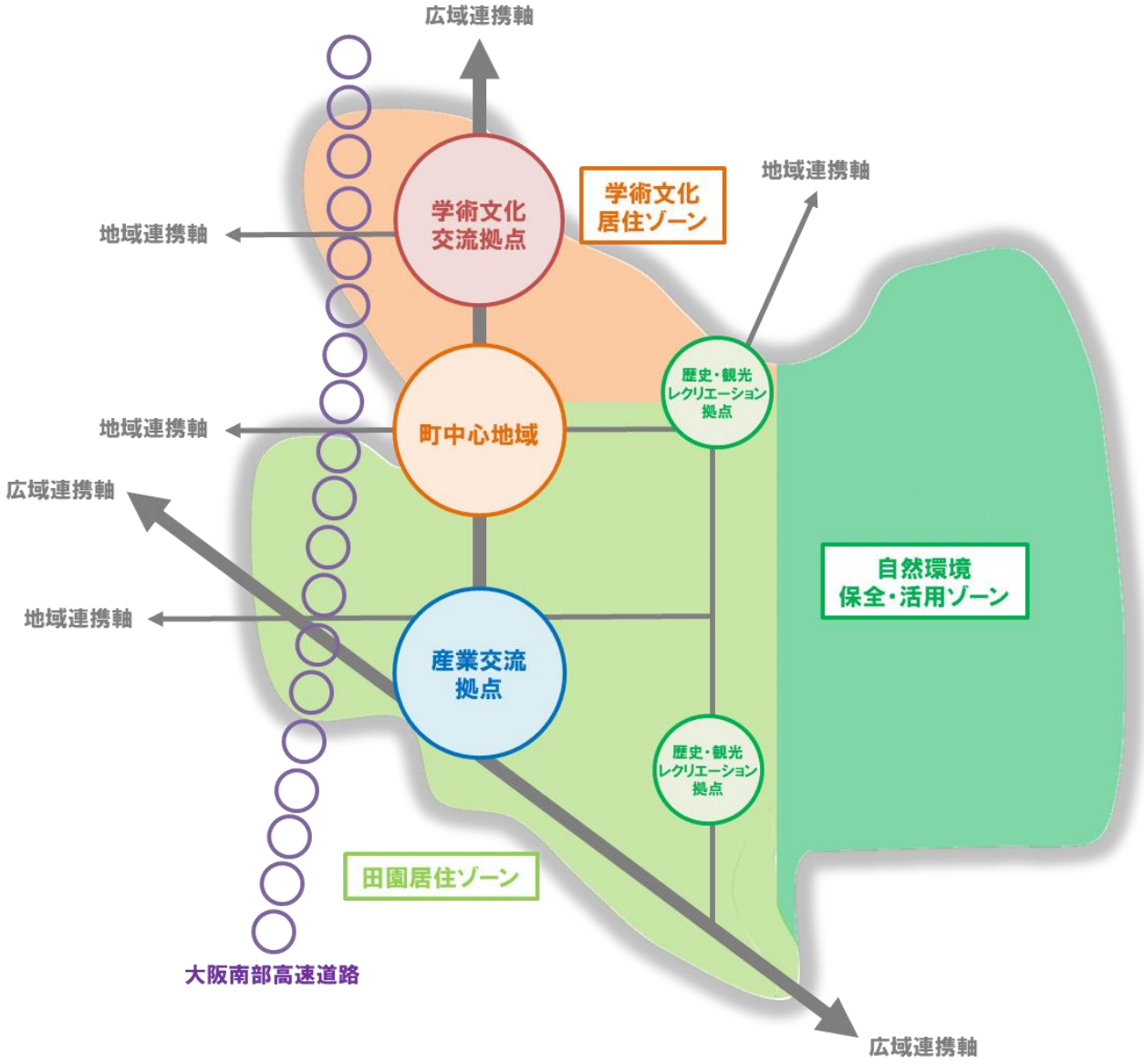
また、広域連携軸の沿道においては、そのポテンシャルを活かし、地域経済の活性化につながる土地利用を推進するとともに、土取り跡地などについては、自然環境に配慮した土地利用の誘導に努めます。

（自然環境保全・活用ゾーン）

金剛・葛城山脈に連なる森林と丘陵部を、みどり豊かな資源、レクリエーションに活用できる自然環境保全・活用ゾーンと位置づけ、自然環境の保全と活用を図ります。

みどり豊かな森林は、その自然環境の保全に努めます。また、豊かな自然や歴史的環境を活かしたレクリエーションや憩いの場の提供と都市住民との交流が図れる土地利用を進めます。

＜将来都市構造＞


広域連携軸
地域連携軸
学術文化
交流拠点
学術文化
居住ゾーン
地域連携軸
地域連携軸
町中心地域
歴史・観光
レクリエーション
拠点
広域連携軸
地域連携軸
自然環境
保全・活用ゾーン
産業交流
拠点
歴史・観光
レクリエーション
拠点
田園居住ゾーン
大阪南部高速道路
広域連携軸

第４章　施策の体系

都市像	政策	施策	
「来てよし、住んでよし『あ・な・ば』かなん」	安全・安心に住めるまち	防災等への備えの充実	１
		地域の防災力強化	２
		防犯力の強化	３
		消費者保護の推進	４
		交通安全対策	５
	子育てと教育のまち	母子健康事業の充実	６
		子育て支援の充実	７
		地域ぐるみの子育ての推進	８
		教育の質の更なる向上	９
	みんなが生涯活躍できるまち	障がい者福祉・自立支援の充実	１０
		めざせ健康寿命№１	１１
		ＱＯＬ（Quality of Life）の向上	１２
		地域の創意工夫ある取組みの推進	１３
		生涯学習の充実	１４
		人権尊重・平和の推進	１５
		男女共同参画社会の推進	１６
	快適で賑わいのあるまち	移住定住促進	１７
		持続可能な農林業等の推進	１８
		産業の振興、ブランド力の強化	１９
		大学・企業との連携推進	２０
		まちの姿に合うインフラの整備・維持	２１
		地域公共交通の充実	２２
	自然と歴史に囲まれたまち	自然と歴史	２３
		美しいまちかなん	２４
		地球温暖化対策の推進	２５
	最先端のまち	最先端技術の活用による行政の効率化及びサービスの向上	２６
		電子化の推進	２７